

けん玉の輪を広げる場を提供する

一昨年、初めて甘日市市でけん玉ワールドカップを主催した（一社）グローバルけん玉ネットワーク（以下GLOKEN）代表の窪田保さん。広島大学在学中にけん玉サークルを立ち上げました。その後、国内外でけん玉を通じたコミュニケーションの輪をさらに広げるため、平成24年にGLOKENを設立。以降、けん玉の普及活動にまい進しています。



けん玉ワールドカップ大会主催
（一社）グローバルけん玉ネットワーク代表理事
窪田保さん（34歳・長野県松本市）

「20もの国と地域から選手が集まる大会を開催でき、本当にうれしく思います。甘日市市を始め、多くの企業やコミュニティの支えが無ければ成功できませんでした。もちろんけん玉を愛する皆さんの力も不可欠です。けん玉ワールドカップの舞台を目指す、すべての人に楽しんでもらいたい」と頬を緩め話します。

「これまでの優勝者はけん玉歴数年の選手ばかり。世界チャンピオンになるまでに重ねてきた努力を想像すると、彼らを心から尊敬せずにはいられません。ただしけん玉は「けん玉が上手い人だけのもの」ではありません。誰もが気軽に楽しめるものなので、ぜひ多くの皆さんに手に取って遊んでもらいたいと思っています」と話してくれました。

（一社）グローバルけん玉ネットワークは、「けん玉で世界をつなぐ」を合言葉に、平成24年の設立以降、世界中のけん玉プレーヤーと手を携え、けん玉の国際的な普及に取り組んでいる。日本のけん玉を、世界に誇る体験型コンテンツ「KENDAMA」として発信し、けん玉コミュニティの世界的拡大に寄与することを目指し活動している。

創り出す「場」と「モノ」の 引力が世界を魅了する。

日本の匠の技術で世界に勝負する

「ここで作るけん玉は、誤差0・2mm以内です」と力強く話し始める伊ワタ木工の岩田知真さん。多くのプレイヤーが愛する「夢元無双」を製造しています。7月に発表した新作は即完売。繊細な加工技術と美しい玉の塗装には、けん玉作りへの熱い思いが表れています。



けん玉ワールドカップ優勝トロフィー製作者
（株）伊ワタ木工代表取締役
岩田知真さん（33歳・峠）

「欲しいと思っても買えないけん玉になるよう、利用者の目線でモノづくりをしています。今までどおりのものを量産するだけでなく、穴の角度を数度変えてみるなど、多くの工夫を凝らしています。技が決まればけん玉をさらに好きになつてもらえると思っています」。

岩田さんは毎年ワールドカップの優勝トロフィーも製作しています。今年のトロフィーは土台などに世界一硬い木材を使用し、玉はゴールド、けん玉は黒色で、光線を当てると虹色に輝くという大作。世界チャンピオンにふさわしいものとなりました。「世界に羽ばたくプレイヤーをモノづくりで支えられることが喜びです」と笑顔で話してくれました。

けん玉ワールドカップ裏話

塩田ひとし実行委員長に2日間を振り返ってもらいました。

去年の優勝者であるワイヤット・ブレイさん（20歳）は今年予選突破となりませんでした。理由を聞いてみると、審判が成功と判定した技に、ブレイさん自身が納得せず、やり直したからとのこと。2連覇を目指し、国やチームの期待を背負って遠くアメリカから参加したブレイさん。悔しい気持ちを抑え、フェアにやりたいと自ら申告したと聞き、自分に正直にプレーすることの大切さを感じました。大会では、同じような逸話がたくさんあるのだろうと思いま



予選終了後、握手を交わす塩田会長とワイヤット・ブレイさん。

成熟度を増した大会

外国人選手も含め、初回の約4倍の選手が訪れた今大会。間違いなく国際的な大会に発展していると感じています。日本全国を見ても、甘日市市のような規模の自治体で、ここまで世界的でユニークなイベントがあるところはありませぬ。市民として、鳥肌が立つほどうれしい。

大会の開催は、市の魅力を世界に発信する起爆剤であると確信しています。来年以降も多くの人に訪れてもらえるよう、受け皿を確かなものにしていくの

グローバルな風を感じる

けん玉を手に、外国人選手に話し掛ける子どもたちの姿を見て、胸が熱くなりました。けん玉という1つのことに真正面から向き合っている選手たちは、とても素直で友好的な人ばかり。そんな選手たちと触れ合う子どもたちの目は輝き、言葉が分かんなくてもけん玉を通してコミュニケーションを取っている。この地に多くの外国人がけん玉という1つの目的を持って訪れてくれることは、明日を担う子どもたちにとって素晴らしいことだと思えます。グローバルな感覚を備えた人材の育成に、

オールはつかいち

大会が一段落していることに喜びを感じます。

市内ではけん玉がもう「ほっとけんモノ」になってきています。発祥の地であり、世界中から支持されるけん玉の製造やけん玉モチーフの商品などもあり、大会はオールはつかいちのイベントとして浸透しています。

市や議会をはじめ、多くの企業の皆さんから理解と協力、協賛をいただき、成り立っているけん玉ワールドカップ。甘日市市発展のパワーの源となるよう、大会に磨きをかけることで、地域に貢献していけたらと思っています。



けん玉ワールドカップ大会実行委員長
（一社）はつかいち観光協会代表理事会長
塩田ひとしさん（68歳）



古田晴一くん

寝ても覚めてもけん玉のことを考えているという古田晴一くん（7歳）。「プロになって世界中を回りたい」と元気いっぱいに答えてくれた。母の敦美さんは「数あるけん玉の中から一緒に寝るけん玉を選び、毎晩枕元に並べています」と目を細めて話す。

次世代挑戦者

今回初めて、特別枠で中学生未満の選手が8人出場。大人顔負けの熱意と技を披露した2人を紹介。

松富裕輝くん

家族全員がけん玉に夢中という、「けん玉一家」の一員、松富裕輝くん（9歳）。憧れの選手は久保田悟さんとのこと。「失敗しないよう、毎日練習をしています」と話してくれた。母の佐知子さんは「家族で共通の趣味があるのはとてもうれしい」と笑顔で話す。

